

## 西晋辞賦文学研究：左思「三都賦」を中心に

栗山，雅央

<https://doi.org/10.15017/1500459>

---

出版情報：Kyushu University, 2014, 博士（文学），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



論文題目 西晋辞赋文学研究—左思「三都賦」を中心に—氏名 栗山 雅央

## 論文内容の要旨

本論文は、中国六朝文学における「三都賦」の価値を明確化し、西晋文学に新たな視座を提示することを目的として論述したものである。併せて、三国時代以降の辞賦文学史の流れについても、「三都賦」を基点として通時的に考察している。

第一章は、「三都賦」が著された当時の社会政治状況について考察した。作者である左思の序文、及び張華、劉逵、衛権、皇甫謐ら同時代の文士による「三都賦」評価を通して、「三都賦」に見える文献資料や史実などの現実世界に対応する作品世界の構築、すなわち文学の写実性が最も重要視されていた点を指摘した。これは当時に流行した地方志の編纂、西晋王朝による孫呉の平定などの社会政治状況と強く関係している。張華による『博物志』の編纂も、このような社会政治情勢の所産として位置付けられる。

第二章と第三章は、「三都賦」の完成と同時期に施された注釈である、劉逵と張載の「三都賦」注の特徴及びその注釈の成立背景を考察した。劉逵注は文献資料の大量引用を特徴とし、張載注は賦本文に対する史実考証を特徴とするが、これは左思が序文で表明し、同時代人の多くが評価した文学の写実性の根拠となるものである。劉逵や張載の注釈が相次いで発表されたのは、何よりも彼らが中書省の官僚であったためである。中書省とは、王朝が収蔵するさまざまな公文書や文献を保管する部署である。「三都賦」の著述と時を同じくして、陳寿の『三国志』も中書省で編纂されており、彼らのような中書省に在籍する文人集団による著述活動の場があったことを想定した。これは、従来指摘されているような、賈謐の「二十四友」や石崇の「金谷の集い」などの文雅の交友集団とは全く異なる形態のものであった。

第四章は、「三都賦」をめぐる著述活動が中書省を基点に展開された事実、そして「三都賦」について従来指摘される写実性、類書的安全性、西晋王朝の宣揚、これらすべてを包括する背景に、西晋武帝期（265～290）に特有の社会政治状況、とりわけ武帝司馬炎の意向が介在することについて論じた。「三都賦」が著された当時は、内政外交両面にわたり西晋王朝は喫緊の政治的課題を抱えた状態にあり、「三都賦」の著述もこれらを反映したものであった。就中、西晋王朝の正統性は陳寿の『三国志』や杜預の『春秋左氏経伝集解』にも同様に特筆されているものであり、彼らによる著述はまさに武帝の意向を反映してなされたものであった。左思の「三都賦」

は今日的な意味での純文学的な作品ではなく、当時の政治社会状況や西晋王朝による文教政策に即して、極めて政治的意図が込められた作品であった。左思、陳寿、杜預による著述活動が当時の所謂「文学」に限られない著述活動全般を特徴付けるものであることを明らかにした。

第五章では、「三都賦」の著述に先がけて左思が著した「齊都賦」について、両作品の関係性を考察した。「齊都賦」と「三都賦」はいずれも都城賦に属するものの、厳密には異なる系統に属する作品である。しかし、地方の特色を描き出そうと努める姿勢を「齊都賦」に見出せることから、「三都賦」に見える写実性の萌芽を看取することができた。但し「三都賦」に比べ徹底されていないことから、「三都賦」の写実性が当時の社会政治状況との関わりに起因することを実証した。また左思の作風から、都城賦が彼の最も得意とした主題であることを明らかにした。

第六章は、漢代にそれぞれ著された班固「兩都賦」と張衡「二京賦」、この両作品と「三都賦」との関係性について考察した。作品の枠組みにおいて「三都賦」が漢代都城賦の影響下にあること、その一方で描写内容は都城部の町並み表現、動植物の記述、そして戦乱の描写などにおいて変化が加えられている点を指摘した。とりわけ、戦乱の描写は曹魏時代の歴史叙述に置き換えられており、これは左思による西晋王朝への配慮であることを指摘した。総じて「三都賦」は従来の漢代都城賦とは異なる独自性を備えた作品であり、当時の社会政治情勢に反応した結果として生じたことを論証した。

第七章は、「三都賦」以後に都城賦がどのように展開したのか、そして「三都賦」は後世どのような作品として他の辞賦作品の中に取り込まれ、変容していったのかについて論じた。「三都賦」以後も都城賦は現れるものの、「三都賦」のような複数篇の作品ではなく、単篇で構成されるものが多い傾向にあった。これは、漢賦が持つ諷諫の精神への回帰の結果であった。このような状況にあって、「三都賦」そのものは後世も読み継がれ、鮑照「蕪城賦」や庾信「哀江南賦」にその継承関係が看取れる。「三都賦」以後は都城賦という主題による著述は少なくなっていくが、「三都賦」自体は後世の多様な辞賦作品に継承され、結果として他の文学作品への多大な影響力を備えた作品へと変容したことを論証した。

以上、本論文は六朝文学、中でも近年さほど研究が進められていない辞賦作品について、当時の社会政治状況との関わりから、その著述背景及び創作活動の実態の解明を行ったものである。「三都賦」の分析を通して、六朝時代の政治と文学の密接な関係をより実証的に考察することにより新たな知見を提出するものである。